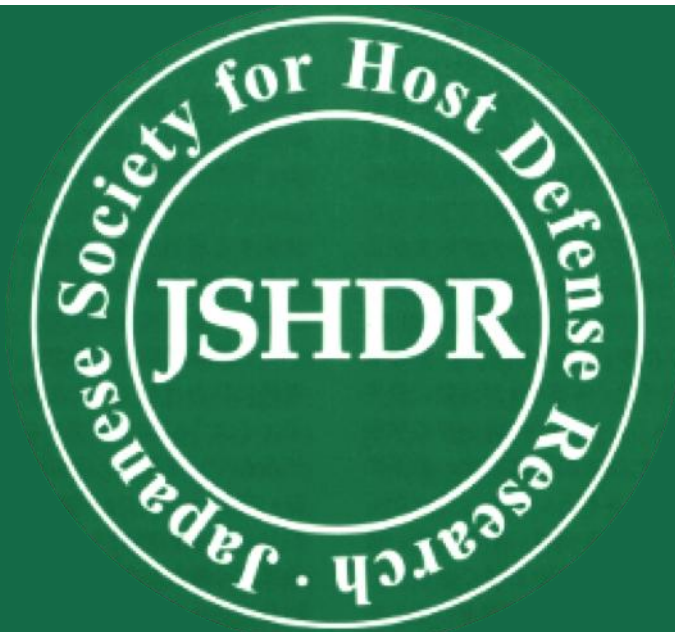




Host Defense

News Letter 2025-1

目 次

■第36回日本生体防御学会学術総会のご案内

澤 智裕 (第36回学術総会長 熊本大学)

■令和7年度日本生体防御学会奨励賞の募集

■第37回日本生体防御学会学術総会のお知らせ

安達 禎之 (第37回学術総会長 東京薬科大学)

■連載企画：受賞者の軌跡 梅村 正幸 (琉球大学)

土屋 晃介 (金沢大学)

■学会事務局からのお知らせ

■日本生体防御学会現役員 (令和6年1月～令和8年12月)

■編集後記

発行：日本生体防御学会事務局
〒890-8544 鹿児島県鹿児島市桜ヶ丘8-35-1
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科免疫学分野 気付
TEL：099-275-5305 / FAX：099-275-5306
E-mail：jshdr@kufm.kagoshima-u.ac.jp
学会ホームページ <https://jshdr.jimdofree.com/>

目 次

□第 36 回日本生体防御学会学術総会のご案内	2
-------------------------	---

澤 智裕 先生（第 36 回学術総会長 熊本大学）

□令和 7 年度日本生体防御学会奨励賞の募集	7
------------------------	---

□第 37 回日本生体防御学会学術総会のお知らせ	8
--------------------------	---

安達 禎之 先生（第 37 回学術総会長 東京薬科大学）

□受賞者の軌跡	9
---------	---

梅村 正幸 先生（琉球大学熱帯生物圏研究センター）

土屋 晃介 先生（金沢大学がん進展制御研究所）

□学会事務局からのお知らせ	15
---------------	----

□日本生体防御学会現役員（令和 6 年 1 月～令和 8 年 12 月）	16
--------------------------------------	----

□編集後記	18
-------	----

□賛助会員一覧	19
---------	----

令和 7 年度 第 36 回日本生体防御学会学術総会のご案内

総会長：澤 智裕（熊本大学大学院 生命科学研究部 微生物学講座 教授）

副総会長：安永 純一郎（熊本大学大学院 生命科学研究部 血液・膠原病・感染症内科学講座 教授）

事務局：津々木 博康（熊本大学大学院 生命科学研究部 微生物学講座 講師）

【ご挨拶】

令和 7 年度 第 36 回日本生体防御学会学術総会の総会長を務めさせていただきます、熊本大学の澤智裕と申します。まず初めに、本総会の開催に際し、多くのご支援を賜りました関係者の皆様に深く感謝申し上げます。本年の学術総会を、熊本で開催できることを大変光栄に思っております。

生体防御学は、生命の維持に不可欠な免疫をはじめ、感染症やがん等、さまざまな生体防御機構を探究する重要な学問分野です。日本生体防御学会は、この分野の最先端の研究成果を発表し、議論を交わす場として、長年にわたって多くの専門家の交流と知識の共有を促進してまいりました。

本年の第 36 回日本生体防御学会学術総会では、「Multidisciplinary research in host defense mechanisms」をテーマに、レドックス分子科学に関する特別講演・教育講演、さらには蛇毒やマクロファージに関する最新の研究に関するシンポジウムを企画しており、参加者の皆様に有益で刺激的な内容を提供できるものと確信しております。また、皆様から多くの一般演題をご登録いただき、活発に議論が交わされることを期待しております。

熊本は、自然豊かな環境とともに歴史的な背景も持つ地域であり、参加者の皆様にとって学術的な議論に加えて、地域の文化や歴史に触れながらリフレッシュできる貴重な機会となることでしょう。最後に、この学術総会が、皆様の研究や臨床活動に役立つ貴重な情報交換とネットワーク構築の実り多い場となることを心より願っております。皆様のご参加と活発なご議論をお待ち申し上げます。

令和 7 年度 第 36 回日本生体防御学会学術総会

総会長 熊本大学 澤 智裕

【令和 7 年度 第 36 回日本生体防御学会学術総会開催 HP】

[https://www.microbio-ku.jp/第 36 回日本生体防御学会学術総会/](https://www.microbio-ku.jp/第36回日本生体防御学会学術総会/)

【第 36 回日本生体防御学会学術総会事務局】

担当：津々木 博康

熊本大学 大学院生命科学研究部 微生物学講座

E-mail: jshdr2025office@gmail.com

〒860-8556 熊本市中央区本荘 1 - 1 - 1 Tel. 096-373-5320 Fax. 096-362-8362

【会期・会場】

会期：2025 年 9 月 25 日（木）～27 日（土）

会場：熊本大学病院 くすのきテラス 3 階 大会議室

（〒860-8556 熊本市中央区本荘 1 - 1 - 1）

<https://www.kuh.kumamoto-u.ac.jp/map/kusunoki.html>

【開催形式について】

開催形式は「対面形式による現地開催」です。詳細につきましてはプログラムが決まり次第ご案内差し上げます。

開会：9 月 25 日（木）午後（予定）

閉会：9 月 27 日（土）午後（予定）

【特別講演】

赤池 孝章（東北大学）、住本 英樹（九州大学・久留米大学）

【教育講演】

山崎 秀雄（琉球大学）

【シンポジウム 1】 「巳年に紐解く 蛇（毒）のサイエンス」

上田 直子（崇城大学）、柴田 弘紀（九州大学）、塩井（青木） 成留実（帝京大学）

【シンポジウム 2】 「マクロファージ・ルネサンス熊本」

菰原 義弘（熊本大学）、黒滝 大翼（熊本大学）、劉 孟佳（熊本大学）

【参加される方へ】

1. 参加登録

学会に参加される全ての方（演者の方も含む）は、2025 年 5 月 8 日(木)から 2025 年 7 月 18 日(金)の期間内に、必ず事前参加登録と参加費のお振込みをお願いいたします。参加登録は、開催 HP より参加申込書ファイル（MS Word 形式）をダウンロードし、必要事項をご記入の上、事務局のメールアドレス宛（jshdr2025office@gmail.com）に添付してお送りください。

参加費：正会員	6,000 円
非会員	7,000 円
大学院生（博士課程）	2,000 円
学部生・大学院生（修士課程）	無料

参加費は下記の銀行口座にお振込みください（7 月 18 日まで）。総会前日および当日のご入金は確認が取れませんのでご遠慮いただきますよう宜しくお願いいたします。

（※お願い）お振込みいただいた方の氏名を開催事務局銀行口座の通帳記載により確認する必要がありますので、お振込み者名の入力時には必ず先に「氏名」を記載していただき、続けて「所属」の順に入力してください。例：「クマモトタロウ クマモトダイガク」
所属を先に記載されますと氏名の確認ができなくなる恐れがありますのでご協力の程宜しくお願い申し上げます。

参加費振込先：

銀行名	： 肥後銀行
支店名	： 本店営業部（101）
口座番号	： 2624491 普通預金
口座名義	： 熊本大学微生物学講座 代表 澤 智裕

2. 懇親会

第 36 回日本生体防御学会学術総会の全体懇親会は 2 日目の 2025 年 9 月 26 日（金）夕刻に開催予定です。懇親会参加費は当日会場にてお支払いください。詳細が決まりましたら開催 HP にてお知らせいたします。

3. 演題登録

一般演題へのお申し込みは、開催 HP より抄録作成フォーマット(MS Word 形式) をダウンロードし、指定の形式に従って作成した抄録を参加申込書と共に事務局メールアドレス宛に添付書類としてお送りください。

演題登録の際、「口頭発表」または「ポスター発表」のいずれかをご選択いただけます。「口頭発表」を選択された場合、希望者はポスター発表も行っています。なお、応募数や内容によっては、ご希望の発表形式(口頭/ポスター)の変更を開催事務局よりお願いする場合がございます。あらかじめご了承ください。ポスター発表は、すべて現地会場にてポスターを掲示し、発表およびディスカッションを行っていただきます。さらに、若手研究者(35歳以下)の発表の中から優秀発表賞を選出します。対象となる方は、演題登録の際に「若手研究者」欄にチェックを入れてください。

送付先：jshdr2025office@gmail.com

演題登録期間：2025年5月8日(木)～2025年6月13日(金)

4. 会場へのアクセス

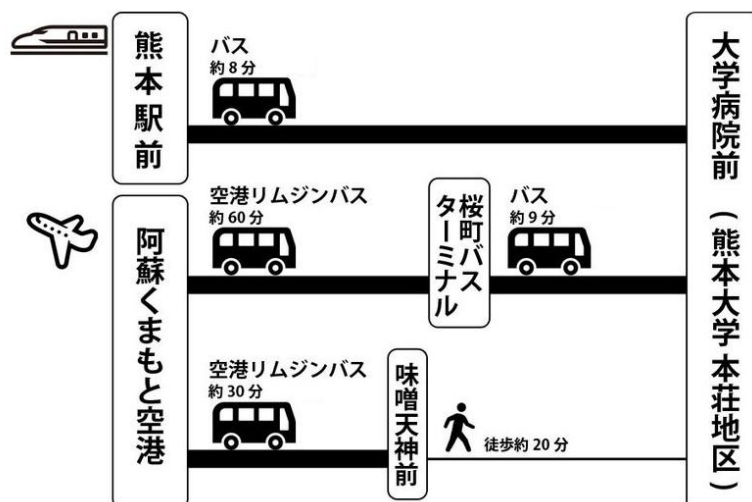
会場周辺地図



熊本大学本荘北地区（くすのきテラス：3階・大会議場）

〒860-8556 熊本市中央区本荘1丁目1番地1号

本荘地区(医学部等)への交通アクセス



熊本駅前から

都市バス（6番のりば）

交通機関	行先	経由	番号
都市バス	第一環状線（子飼方面）	大学病院～大江渡鹿	O2-0
	県立劇場（大学病院方面）	大学病院～大江渡鹿	O3-1
	長嶺小学校	大学病院～日赤病院	G1-6
	長峰団地	大学病院～大江渡鹿	H4-1
	県会議事堂	大学病院～県庁	K6-0

桜町バスターミナルから

都市バス・熊本バス（2番のりば）

交通機関	行先	経由	番号
都市バス	八王寺環状（南熊本方面）	大学病院～八王寺	P0-0
	野越団地	大学病院～済生会病院	P2-1

阿蘇くまもと空港から

「桜町バスターミナル」で下車し、都市バス・または熊本バスにお乗り換えください。

交通機関	行先
空港リムジンバス（2番のりば）	熊本市内行き

（熊本大学交通案内、熊本大学病院アクセスマップより抜粋）

<http://www.kumamoto-u.ac.jp/campusjouhou/access>
<https://www.kuh.kumamoto-u.ac.jp/map/access.html>

令和 7 年度日本生体防御学会奨励賞の募集

日本生体防御学会奨励賞は、生体防御学の進展に寄与する優れた研究論文を発表した若手会員を顕彰することを目的として設けられたものです。奨励賞は、原則として 1 名を選出し、学術総会において表彰を行います（賞状および副賞を授与する）。（奨励賞選考委員会委員長 押海裕之）

選考対象者：以下の各項目に該当する者。

1. ヒトまたは動植物の生体防御に関して、新規な着想による研究、新規な方法を用いた研究、または未開発分野の研究を進めている新進気鋭の研究者。
2. 40 歳未満（当該年 4 月 1 日）の博士号取得者および同等者。
3. 生体防御学に関する優秀な業績を発表した研究者。
4. 本学会会員で過去に日本生体防御学会学術総会で筆頭演者として発表した者。

応募期間：2025 年 5 月 8 日(木)～2025 年 6 月 30 日(月)

応募書類：以下の書類を募集期間内に学会事務局に送付して下さい。

1. 受賞者候補者、業績名、推薦者名を記した推薦書（A4、1 頁、推薦者は本学会会員とし、自薦他薦を問いません。また、書式も問いません。）
2. 主要論文の要旨と別刷（3 編以内、1 編可。要旨の書式は問いません。）
3. 応募者の履歴書
4. 業績リスト

* 応募者の履歴書と業績リストの様式（word ファイル）は学会 HP からダウンロードできます。

<https://jshdr.jimdofree.com/%E5%AD%A6%E4%BC%9A%E5%A5%A8%E5%8A%B1%E8%B3%9E/>

応募先：日本生体防御学会学会事務局

〒890-8544 鹿児島県鹿児島市桜ヶ丘 8-35-1

鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科 感染防御学講座 免疫学分野

Mail: jshdr@kufm.kagoshima-u.ac.jp

TEL: 099-275-5305

FAX: 099-275-5306

第 37 回日本生体防御学会学術総会のお知らせ

学術総会長：安達 禎之 先生 （東京薬科大学 薬学部 免疫学教室）

会期：2026 年 9 月 9 日～11 日

会場：東京たま未来メッセ （八王子市）

シンポジウム

一般講演（口頭、ポスター）

特別講演：田中 正人 先生（東京薬科大学），小山 文隆 先生（工学院大学）

その他の講演者等については検討中でございます。

詳細が決まり次第、会員の皆様へご連絡させていただきます。



『マリンポートかごしまで毎年 4 月末におこなわれる“桜島と芸術花火”』

受賞者の軌跡（第2回）

「17」に導かれた道：IL-17 と結核菌との果てなき攻防

琉球大学熱帯生物圏研究センター感染生物学部門分子感染防御学分野
琉球大学大学院医学研究科生体防御学講座
琉球大学医学部先端医学研究センター動物実験分野

梅村 正幸

2008 年に日本生体防御学会奨励賞を受賞してから、気がつけば早くも 17 年が経ちました。奇しくも、近年メジャーリーグで圧巻の活躍を続けている大谷翔平選手の背番号も「17」。そして、私が受賞時に発表した演題も「細胞内寄生性細菌感染における interleukin-17 の防御機構の解明¹⁾」と、まさに IL-17 の役割に焦点を当てた研究でした。今年は、こうした偶然が重なり、「17」という数字にひととき親近感を覚える年となっています。偶然の一致ながら、17 年目を迎えた今、改めて当時を振り返り、これまでの研究の歩みと今後の展望について述べさせていただきたいと思います。

思い返せば、私が IL-17 というサイトカインに注目し始めたのは、2001 年に名古屋大学大学院を修了し、金沢大学がん研究所（現・がん進展制御研究所）にポスドクとして着任した頃のことです。当時、IL-17（主に現在の IL-17A）に関する論文はまだ 100 編ほどしかなく、その多くが関節リウマチや喘息といった慢性炎症性疾患における臨床的な発現に関するものでした。IL-17 は 1993 年に cytotoxic T-lymphocyte-associated antigen 8 (CTLA-8) として初めて報告され、後に炎症性サイトカイン IL-17 と命名されました。現在では、IL-17A から F まで 6 種類のファミリーが知られています。当初から IL-17 が炎症反応に関与することは示唆されていましたが、当時の私は、IL-1、IL-6、tumor necrosis factor (TNF) といった主流の炎症性サイトカインに比べ、IL-17 はやや“マイナー”な存在だと勝手に位置づけていました。今振り返れば、その認識は浅はかだったと苦笑せざるを得ません。

IL-17 が一躍注目を浴びるようになった大きな転機は、2005 年に *Nature Immunology* 誌に発表された、新たなヘルパー T 細胞「Th17」概念の確立によるでしょう^{2,3)}。それまで知られていた Th1、Th2 とは異なる分化経路と機能を持ち、免疫学の教科書を書き換えるほどのインパクトを与えました。その後の研究で、IL-17 は CD8⁺ T 細胞や T cell receptor (TCR) $\gamma\delta$ T 細胞、さらには innate lymphoid cell (ILC) から産生されることが明らかとなり、その重要性はますます広がっています。

話を戻すと、当時（2001年頃）IL-17（主に IL-17A）に着目したのは、免疫特権部位の再構築を目指すプロジェクトに取り組む中でのことでした。炎症関連分子を一つ一つ検証するというシンプルなアプローチのなか、初期炎症の大部分は IL-1 β に依存していましたが、そこに IL-17 を加えると著しい炎症抑制が得られたことに強い興味を抱いたのを、昨日のことのよう思い出します⁴⁾。その後、感染症における免疫応答を *in vivo* を中心に解析するため、現在の琉球大学熱帯生物圏研究センター（旧・遺伝子実験センター）に着任しました。私の研究対象である「結核」は細胞内寄生性細菌による感染症であり、好中球浸潤を誘導する IL-17 が果たす役割には当初、かなり懐疑的でした（現在では、好中球浸潤による防御の知見も多く報告されています）。しかし実際には、結核菌肺感染時に IL-17 が非常に早期から誘導され、その主たる産生細胞が TCR $\gamma\delta$ T 細胞であることが確認されたことから、IL-17 が結核菌感染防御に重要な役割を果たしている可能性を強く感じました。そこで、東京大学医科学研究所の岩倉洋一郎教授よりご厚意で IL-17A および IL-17F 遺伝子欠損（KO）マウスをご提供いただき、検証を進めました。その結果、IL-17A が結核感染局所におけるエフェクター細胞の浸潤促進や肉芽腫形成の誘導に重要な役割を果たすことを明らかにしました¹⁾。同時に、リステリア・モノサイトゲネス感染肝臓モデルにおいても、IL-17A の関与を報告し^{5,6)}、これらの成果が認められて本学会の奨励賞を賜りました（添付図）。

その後も、結核菌感染モデルを中心に IL-17A の関与を検証し続けています。一般的に、結核菌感染に対する防御免疫では、Th1 型 CD4⁺ T 細胞または Tc1 型 CD8⁺ T 細胞の産生する interferon (IFN)- γ によるマクロファージ活性化が重要であることが知られおり、また、肉芽腫の病態形成が菌の播種を抑制すると考えられています。しかしながら、結核菌感染による肉芽腫病態形成メカニズムについて、当時は未解明な点が多くありました。そこで、結核菌感染により誘導される成熟肉芽腫の形成および維持に関与する分子メカニズムの解明を試みました。肉芽腫形成の過程に IL-17A がどのように関与するのか、結核菌を感染させた野生型および IL-17A KO マウスの肺組織から経時的に細胞接着分子および単球走化性因子の発現を比較した結果、感染早期において、intercellular adhesion molecule (ICAM)-1 および lymphocyte function-associated antigen (LFA)-1 の発現が IL-17A KO マウスで有意に低下しており、これらの発現増強に IL-17A 産生 TCR $\gamma\delta$ T 細胞が直接的に関与していることを見出しました。さらに、この細胞接着分子の発現増強には CD40L が関与していることも明らかにしました。これらのことから、TCR $\gamma\delta$ T 細胞から産生される IL-17A が細胞表面に発現する CD40L を介した細胞間相互作用と協調して ICAM-1 および LFA-1 の発現を促し、迅速に感染局所での肉芽腫形成を導くという新たな知見が得られました⁷⁾。

加えて、結核菌感染肺における IL-17A は Th17 細胞だけでなく¹⁾、TCRV γ 4⁺ および V γ 6⁺ $\gamma\delta$ T 細胞^{7,8)}、ILC3 などからも産生されます。一般に TCR $\gamma\delta$ T 細胞の抗原認識能は TCR $\alpha\beta$ T 細胞より低いとされますが、結核菌抗原刺激に対する IL-17A 産生は予想外に強いものでし

た⁸⁾。現在は、これら異なる IL-17A 産生細胞による感染防御能の違い、すなわち「機能的多様性」の解明に向けて、養子移入モデルを用いた研究を進めています。もっとも、結核菌感染における IL-17A の防御機構は、未だ全容解明には至っておらず、今後も継続的な研究が必要であると痛感しています。

IL-17A は、自己免疫疾患では病態悪化を招く一方、結核においては感染局所でエフェクター細胞浸潤と肉芽腫構築を促す重要な役割を果たします。慢性期においては、Th1 と Th17 応答のバランスを適切に保つことで、過剰な炎症や組織傷害を抑えつつ、結核菌の制御を実現していると考えています。結核における Th1、Tc1、Th17 応答の精緻な制御機構の解明は、今後の抗結核ワクチンや治療法開発に向けた大きな一歩となると期待しています。

最後に、結核菌感染症の中で最も多いのは呼吸器感染症である肺結核です。私は *in vivo* 系での解析を基盤とした研究を展開しており、近年は肺における病態形成の組織学的・分子学的解析についても、さまざまな研究者との共同研究を行っています^{9,10)}。結核菌はバイオセーフティレベル (BSL) 3 に分類される特定病原体であり、動物実験には対応施設が必要ですが、当研究施設では BSL3 レベルの動物飼育室・培養室を備え、全国の研究者と *in vivo* 系の共同研究を進めてきました。近年では、歯学系の先生方と連携し、肺炎球菌や肺炎クラミジア、さらには歯周病菌との混合感染による誤嚥性肺炎の病態解明にも取り組んでいます^{11,12)}。今後も自身の技術と知見を生かし、呼吸器感染症をはじめとするさまざまな感染症研究に貢献していきたいと考えています。

呼吸器感染症にご関心のある動物モデルを用いた共同研究をご希望の方は、ぜひお気軽にお声がけください。生体防御学のさらなる発展に向けて、共に歩んでまいりましょう！

< 参考文献 >

- 1) Umemura M et al, *J Immunol*, 2007. 178(6): 3786-3796.
- 2) Park H et al, *Nat Immunol*. 2005. 6(11): 1133-1141.
- 3) Harrington LE et al, *Nat Immunol*. 2005. 6(11): 1123-1132.
- 4) Umemura M et al, *Int Immunol*, 2004. 16(8): 1099-1108.
- 5) Hamada S et al, *Immunology*, 2008. 125(2): 170-177.
- 6) Hamada S et al, *J Immunol*, 2008. 181(5): 3456-3463.
- 7) Okamoto Y et al, *J Immunol*, 2010. 184(8): 4414-4422.
- 8) Umemura M et al, *Immun Inflamm Dis*, 2016. 4(4): 401-412.
- 9) Toyonaga K et al, *Immunity*, 2016. 45(6): 1245-1257.
- 10) Iizasa E et al, *Nat Commun*, 2021. 12(1): 2299.

11) Okabe T et al, *Int J Mol Sci*, 2021. 22(23): 12704.

12) Kawamura S et al, *Am J Pathol*, 2024. 194(4): 652-662.

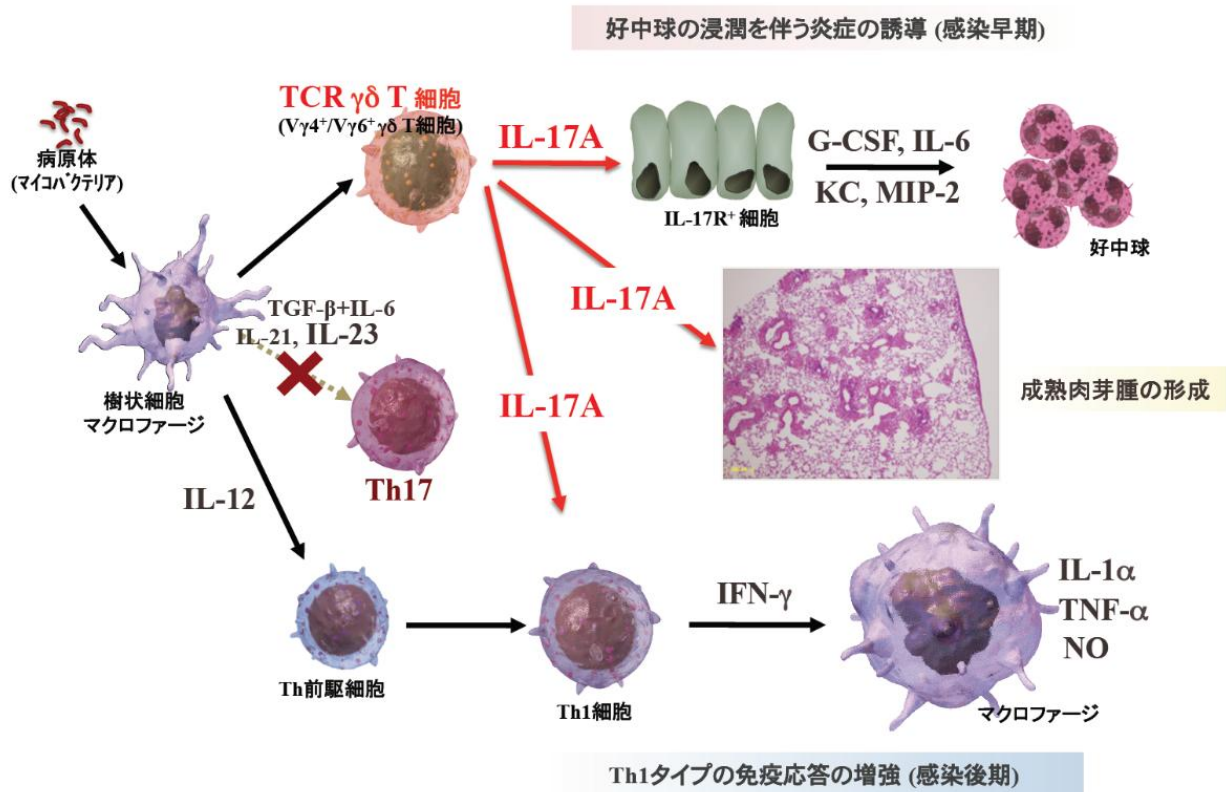


図. 結核菌感染における interleukin (IL)-17A の関与

「細胞内寄生細菌との対話：インフラマソームとパイロトーシスに魅せられて」

金沢大学がん進展制御研究所

土屋 晃介

私は、2012 年度に「病原細菌による宿主細胞のインフラマソーム形成誘導機序と病原因子の関与の解析」の研究で奨励賞を受賞いたしました。当時、私は「細胞内の病原体監視機構の分子機序と生体防御における役割」に興味を持っており、主に細胞内寄生細菌とインフラマソームの相互作用について研究していました。細胞内寄生細菌の細胞内への侵入は、宿主にとって重大な危機にあたると考えられます。そのため、細胞内細菌を監視する仕組みが存在する可能性に興味を抱いていました。実際に、細胞内への侵入が可能な野生型リステリアは宿主マクロファージのカスパーゼ-1 活性化を誘導する一方で、細胞内侵入できない変異株ではその誘導が見られないことから、何らかの細胞内監視機構が機能していることが示唆されていました。私は、その分子機序の解明を行い、特定のインフラマソームが関わることを報告しました。さらに、これを契機としてインフラマソーム研究に魅了され、以降、分子レベルから生体レベルまで幅広い解析を行いました。当時は世界的にインフラマソーム研究への関心が高まっていた時期でもあり、私たちの研究はある程度はその時流に乗ることができたと感じています。本会奨励賞を受賞できたのもそのような幸運が重なったためだと考えています。

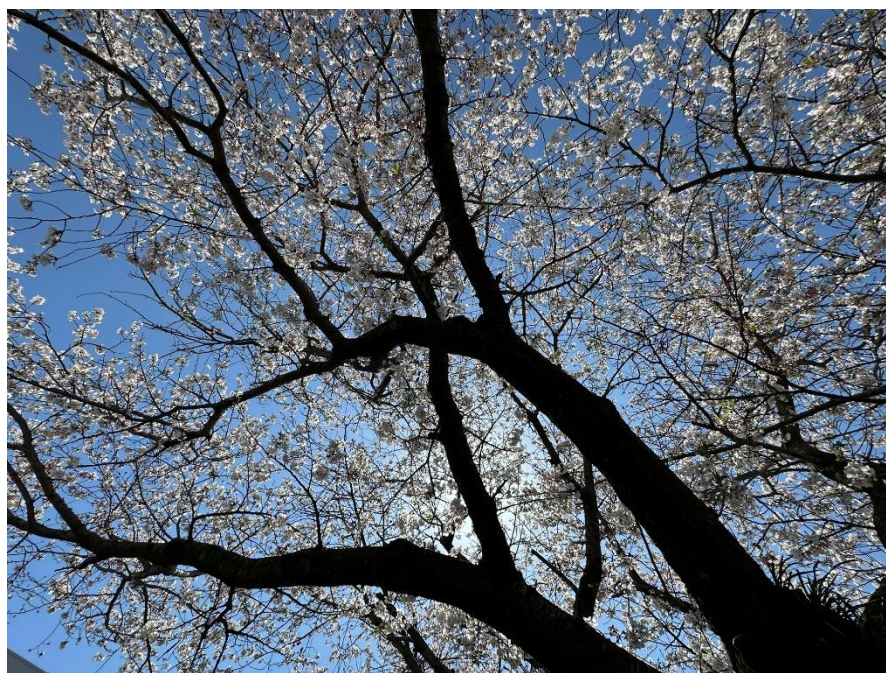
現在、私は計画的ネクロシスの一種「パイロトーシス」にも研究対象を広げています。この研究は、インフラマソーム研究の一環として、カスパーゼ-1 依存的細胞死（パイロトーシス）のメカニズム解明を目指す流れから派生したものです。残念ながら、私たちはパイロトーシスに必須な分子の同定には至らず、2015 年に海外のグループによって細胞質蛋白のガスダーミン D (GSDMD) がカスパーゼ-1 依存的なパイロトーシスの実行因子であることが明らかにされました。GSDMD は、カスパーゼ-1 に切断されることで活性化し、細胞膜に孔を形成することでパイロトーシスを誘導します。興味深いことに、GSDMD 以外の GSDM ファミリー分子（GSDMA-GSDME）も他の特定のプロテアーゼ（カスパーゼやグランザイムなど）による切断を受けることで活性化して同様

にパイロトーシスを引き起こします。これら一連の発見は、この 10 年間で大きな注目を集めるトピックになりました。私たちも乗り掛かった船と言わんばかりにパイロトーシス関連の研究成果を発表しており、また、現在進行形でプロジェクトを進めています。一例を挙げれば、GSDM ファミリー分子が病原微生物のプロテアーゼによって切断される可能性を考え、そのような細菌由来プロテアーゼの探索に取り組んでいます。GSDM ファミリー分子を切断する細菌由来プロテアーゼは、パイロトーシスを促進（または抑制）することで感染病態に何らかの影響を与えるかも知れません。そのような場合、GSDM ファミリー分子を「細胞内で病原体のプロテアーゼ活性を監視する分子群」と解釈することもでき、感染現象をより高解像度で理解することにつながると期待しています。

これまでの振り返ると、私の研究の進め方は、細胞内寄生細菌と宿主の相互作用を研究テーマの軸に置きつつ、新しい概念やトピックを結びつけるという形が主でした。このような方向性は、ある程度意図的に選択してきたものであり、結果として自身の研究成果をより広くアピールすることにもつながったと考えています。一方で、今後の研究人生においては、他者が開拓したトピックを取り入れるだけでなく、自ら新しい潮流を作り出し、他者を巻き込むような発見を目指したいという思いがあります。そのためには、自身の研究姿勢や目標設定において大幅な意識改革が必要であると感じています。研究領域をさらに深掘りして新しい視点や画期的な仮説を構築すること、異分野の技術や知見を積極的に取り入れて新たな研究の切り口を開くこと、長期的なビジョンとその実現に向けた戦略を描くこと、さらには応用や社会実装の可能性を模索し、リーダーシップを発揮していくことなど、多様なアプローチを組み合わせる必要があると考えています。この先 10 年、20 年後に生体防御研究がどのように進化していき、どのような成果が求められるのかを見据えながら、私自身も研究分野の発展に貢献し、今後も生体防御学会を盛り上げていく一助となることができれば幸いです。

学会事務局からのお知らせ

E-mailでもご案内しました通り、本学会でもマイページ管理を導入いたしました。これに伴い、年会費につきましても、クレジット払い及び郵便振り込みが選択いただけるようになりました。なお、これまでのように払込取扱票の郵送は致しませんのでご了承ください。年会費の支払履歴の確認や、領収書発行、登録内容の変更手続き等もご自身で行っていただけます。マイページへのログインには、メールアドレスの登録が必須となっております。IDはメールアドレス、初期のパスワードはメールにてお知らせいたしますので、ログイン後に各自必ずパスワード変更をお願いいたします。運用を始めて間もないため、ご不便をおかけすることもあるかと存じますが、お気づきの点がございましたら、事務局までお知らせください。



『鹿児島大学病院にある桜の木』

日本生体防御学会現役員（2024年1月～2026年12月）

【理事（理事長）】

原 博満（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科）

【理事】（8名）

赤池 孝章（東北大学大学院医学系研究科）
安達 禎之（東京薬科大学薬学部）
押海 裕之（熊本大学大学院生命科学研究部）
倉田 祥一朗（東北大学大学院薬学研究科）
澤 智裕（熊本大学大学院生命科学研究部）
新開 大史（北海道大学人獣共通感染症国際共同研究所）
住本 英樹（九州大学大学院医学研究院）
中川 一路（京都大学大学院医学研究科）

【監事】（2名）

金城 雄樹（東京慈恵会医科大学） 松崎 吾朗（琉球大学熱帯生物圏研究センター）

【運営委員】（20名）

赤池 孝章（東北大学大学院医学系研究科）
安達 禎之（東京薬科大学薬学部）
石井 健（東京大学医科学研究所）
一戸 猛志（東京大学医科学研究所感染症国際研究センター）
岩渕 和也（北里大学名誉教授）
梅村 正幸（琉球大学熱帯生物圏研究センター）
押海 裕之（熊本大学大学院生命科学研究部）
笠松 純（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科）
川上 和義（医療法人ひろせ会広瀬病院）
川畑 俊一郎（九州大学名誉教授）
金城 雄樹（東京慈恵会医科大学）
倉田 祥一朗（東北大学大学院薬学研究科）
澤 智裕（熊本大学大学院生命科学研究部）
新開 大史（北海道大学人獣共通感染症国際共同研究所）

住本 英樹（九州大学大学院医学研究院）
高江洲 義一（琉球大学熱帯生物圏研究センター）
土屋 晃介（金沢大学がん進展制御研究所）
中川 一路（京都大学大学院医学研究科）
松崎 吾朗（琉球大学熱帯生物圏研究センター）
宮野 佳（川崎医科大学自然科学）

編集後記

今回のニュースレターでは、第 36 回日本生体防御学会学術総会長の熊本大学・澤智裕先生より本年の学術総会の御案内を頂きました。加えて、東京薬科大学・安達禎之先生からは第 36 回日本生体防御学会学術総会のお知らせを頂きました。連載企画「受賞者の軌跡」では琉球大学・梅村正幸先生、金沢大学・土屋晃介先生から御寄稿を頂きました。受賞者の先生方におかれましては、御多忙と存じますが、是非御執筆をお願い致します。その他、ニュースレターへの掲載を御希望の先生方におかれましては、御連絡いただければ幸いです。皆様のご協力をどうぞ宜しくお願い申し上げます。

(記：鹿児島大学医歯学総合研究科 免疫学分野 講師 笠松 純)

～複製される方へ～

日本生体防御学会では、複写複製、転載複製及び AI 利用に係る著作権を一般社団法人学術著作権協会に委託しています。

当該利用をご希望の方は、(社)学術著作権協会 (<https://www.jaacc.org/>) が提供している許諾システムを通じてご申請下さい。

日本生体防御学会をご支援くださいます、賛助会員の皆様に
深く御礼申し上げます。

賛助会員（50 音順）

ハウスウェルネスフーズ株式会社

兵庫県伊丹市鋳物師 3-20